
NeoTokyoPunks Guild-XX Generative Story 《特別編 - Chapter2》

ミッション2《潜入後、想定外の事態が発生。何が起きた？そして、それにどう対応するか検討せよ》

BrainVerse at 東京都庁内(カニング)

「そういえばこの東京都庁内に休憩所があったよなあ。高級コーヒー飲み放題だったはずだしちょっと行ってみるかな。今の僕はかなりの重鎮だから、誰かに会っても問題ないよね。」

カニングはBrainVerse立ち上げ時、「質の高い仕事には、質の良い休憩が必要だ」と言い張って、休憩所の設営をおこなっていた。それも相当の充実っぷりで周りからは呆れられるくらいのものだ。そこに意気揚々と向かった。

「うわ！なんだこれ！」

なぜか大幅なアップデートが行われており、休憩所というには豪華すぎる現状に驚きを隠せなかった。最新の最上位機種のマッサージールーム、個室サウナ、トレーニングルーム、Bar、レストラン、カフェ。あらゆる癒しが揃っていた。

「ゴクッ。緊急事態だな。なにから手を付ければいいんだ・・・。」

カニングは右往左往していた。その為、周りの注目を集めたようだ。見かねたのか、女性が近づいてきた。

『XXXXX様。何かお探しですか？よろしければお手伝いいたします。』

カニングは、ド肝を抜かれた。筆舌に尽くし難い絶世の美女が突然話しかけてきたからだ。パニックを起こしたが、持ち前の処理能力で瞬く間に持ち直し、ある一つの目的を達成できると確信した。そして、重鎮を装いつつ行動を起こした。

「そう、君を探していたんだ。一つ、私の頼みを聞いてくれないか？」

『私で良ければ、よろこんで。』

「よかった。私の夢の実現には、君の力が必要なんだ。ちょっとBarlにきてくれ。そこでゆつくりと君の意見を聞きたい。」

『かしこまりました。』

カニングは心の底から今の状況を喜んだ。

(絶世の美女とBar!!!!絶対に口説くぞ!!これは一世一代の大勝負。計画的に動かなくては。まずはkochaに連絡だ。)

そしてkochaの元にメッセージが届いた。

「お花を摘んできます。」

コレを機に、カニングからの連絡は途絶えた。

XXアジト

『さーて。残念なお知らせがあります。カニングはもう、当てにならないわ。』

kochalは、盛大な溜息と共にXXメンバーに告げた。

「え！？トラブルですか」

『いえ。恐らく、奴のダメな所が遺憾なく発揮されてしまっただけよ。』

「あー。。。。」

『でも、問題ないわ。一番重要な仕事は完遂しているから。皆、準備が出来次第DIVEして。

指示はこっちから出すわ。』

「了解！」

今回XXメンバー達は、JOKERSに扮して潜入する。その為、DIVE後の座標が分からないので、指示役としてkochalはXXのアジトに残る。

『BV Policeには気を付けてね。いくらアドレスが許可されているからといっても、正式な手続きを踏んでないから、どうボロが出るか分からない。私たちのHigh neck XXは、BV Policeの検知を阻害するけど絶対じゃないから、とにかく目立たない事！』

「了解」

『DIVE後は、現状報告。そして東京都庁を目指しなさい。あとカニングを見つけたら...よろしくね。』

GUILD-DENNOWからWTは東京都庁にアリとの情報があり、まずは緊急ミッションを片付ける事を優先する手はずとなった。各自の立ち回りを確認後、次々とXXメンバーダイブしていった。そしてJOKERSもそれに続いた。

BrainVerse at 新宿駅

「DIVE成功。こちら新宿駅と思われる。XXとJOKERS、全員無事です。」

XXメンバーは、司令塔であるkochaに次々と情報を送る。

『了解。しばらく情報収集に励んで。不測の事態に陥れば迷わずカードを切りなさい。』

「承知しました。」

リサーチと共に行進し、あまりにもあっけなく東京都庁にたどり着いた。

BrainVerse at 東京都庁

その時、XXに緊急連絡が入った。

《緊急連絡。そこはトラシメヌス湖畔だ。至急避難しろ》

「ここは東京都庁なのに、なんだこのメッセージ。」

「…ハンニバルだ。やられた!待ち伏せか。かなりのPunksが侵入したのに、ここまでスムーズすぎたわけだ。」

「となるとやばいな。すべてBVにモニタリングされている、、」

「奴ら、脳チップを通じて脳に直接攻撃してくるかもしれない、、」

『観念しろ。ネズミども』

手遅れだった。気付けばすでにBV Policeに囲まれていた。そして奥から明らかに身分が高いであろう者が現れ、手元でなにかを入力した。

その途端、XXとJORKERは消えてなくなった。

『掃除完了。みな解散だ。』

????(場所は未定。)

「どこだここは？」

『気が付いたか。』

「「「！？」」」

そこには、先ほど我々を消した張本人がいた。

「きつ、貴様！なんのつもりだ」

『落ち着け。私だ。kochaだ。』

「「「へっ？」」」

『全員無事か？』

「えーつと……。6名足りません。」

『そいつらはいい。問題ない』